

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（八）

—— 41幻香〜47総角香 ——

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二）」1桐壺香〜6末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三）」7紅葉賀香から12須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四）」13明石香〜18松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五）」19薄雲香〜24胡蝶香」（『社会科学』第44巻第3号、二〇一四年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（六）」25蛩香〜30藤袴香」（『社会科学』第44巻第4号、二〇一五年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（七）」31真木柱香〜40御法香」（『社会科学』第45巻第1・2号合併号、二〇一五年八月）の続編として、41幻香から47総角香までの七つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているの

で、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

矢野環
岩坪健
福田智子

凡例

- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〴〵を付して丁数を記す。
- 一、考察には、（一）竹幽本組香の方法、（二）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（一）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。
- 一、巻末には影印を付す。

41 幻香

【翻刻】

△幻香

大空をかよまほろし夢にだに

見へこぬ玉のゆくゑ尋ねよ

一 試なし。

一 名乗紙にて聞く也。

一 一二三の香、各三包充、都合九包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。」四四ウ

一 連座おもひより次第、三柱の内一柱を幻と極め、その一柱斗を聞て、札紙に書出す也。たとへは一の香を幻にせんと思は、同香何炷目くに出たると聞覚へ、九炷濟て書出す也。

へ(朱) 一の香を幻にすれば 一二三の香は聞捨也

へ(朱) 二の香を幻にすれば 一三の香は聞捨也

へ(朱) 三の香を幻にすれば 一二の香は聞捨也」四五オ

九包の内、同香三柱を聞也。試なし。故一二三の名目はしれず。何にても同香を三柱聞て幻と極め、銘々書出すべし。

たとへは

二	五	七
幻	幻	幻
	名	

如此記し出す。

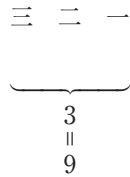
一 記録点は、何人にも一点充也。認様左のごとし。」四五ウ

幻香記

〔表〕四六オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、「一」「二」「三」の香を各三包、計九包を出香する。
* 試香はない。答えは名乗紙に書き、すべて焚き終わってから正答を披露する。

答え方は、三種類の香のうち、最も明確に聞き分けることができた自信のある香を、各自「幻」と決め、その一種類の香が何炷目に出たかだけを、九炷すべて聞き終わってから名乗紙〔札紙ともいう〕に書く。「幻」以外の二種類の香は聞捨にする。

ちなみに、試香がないため、三種類の香のうち、どれが「一」「二」「三」の香であるかはわからないが、どれにせよ、自ら決めた同香一種類を三柱聞き当てることが重要である。記録点は、何人聞き当てても一点ずつ加える。

以上の竹幽本は、蘭之園本と全く同じ組香である。強いて差異を求めるならば、「香之記」の記し方が、蘭之園本は、聞き当てた場合にのみ「まほろし」と記すのに対し、竹幽本は、すべてに「まほろし」と記した上で、聞き当てた香にのみ合点を付す点であろう。

(2) 『源氏物語』との関わり

巻名歌に詠まれ、巻の名にもされた「幻」とは、幻術使を意味する。その者は幻術を駆使して亡き人の魂のありかを捜し求め、遺族の思いを伝えると信じられていた。前の巻で最愛の紫の上を亡くした光源氏は悲嘆にくれ、生きる力を失った。一周忌を済ませた後、飛来する雁を見て源氏が詠んだ和歌が巻名歌である。

① 大空を通ふ幻夢にだに見えこぬ魂の行方尋ねよ (4) 五四五頁

雁はあの世とこの世を行き来すると考えられていて、雁を幻術使になぞらえたのである。

その年の暮れ、源氏は出家の準備をして、物語から退場する。

42 匂宮香

【翻刻】

△匂宮香

おほつかな誰に問まじいかにして

はしめもはてもしらぬ我身そ

一 十炷香の札を用。

一 源氏の香、女三宮の香、柏木の香、各三包包充、匂宮香一包包充、都合十包の内、八包出香とす。

一 匂宮香斗り外に拵へ試に出す。地香は試なし。」四六ウ

一 地香九包打交、其内四包除、残五包に匂宮の香一包加へ、都合六包とし、扱て除たる四包の内、二包取て初に二炷開に焚出し、包紙を開て後に六包を一炷充焚出し、六炷皆終て包紙を開くべし除たる二包は不用。

一 地香三種は無試十炷香の通りに札をうつ。匂宮香は試ある故に定てウの札をうつ也。初二炷開の内、一番目二番目に出たる香を直に試にする心也。たとへは一番目柏木香なれば、始終柏木香には一の札を中り」四七オとす。故に初二炷の香と、後に出る六炷の香と同香にて、札銘上下結たるを中とする也。初二炷ともに同香出たる時も、此例に準べし。匂宮香出たるは、聞に左の哥を認る也。

(朱) 三番目 おほつかな (朱) 四番目 誰に問まじ

(朱) 五番目 いかにして (朱) 六番目 初めもはても
(朱) 七番目 しらぬ我身ぞ (朱) 八番目 かほる

- 一 記録点は、匂宮独聞五点、二人四点、三人より三点充、聞
違独は星二つ、二人より一つ充附る。地香独聞二点、二人
より一点充」^{四七}聞違星なし。初に同香二炷出たるに、聞
違て別香二炷と聞て、一二の札打たる時は、其二枚の内と
後五枚の内と上下結たるに点をかくる。初二炷の出様によ
つて、初後に結たる香二組有事もあり。兎角に初後の上下
結ざるは点なし。然とも、初二炷の内に出ざる香、後の五
炷の内斗りに出て、後斗りにて上下結たるは是も中りにし
て点あり。
- 一 香元には出香の名目を記し、聞の下には其札の数字」^{四八}オ
を認るべし。初二炷は中りても点なし。
- 一 記録認様大概左に顕す。

玉椿紋 (朱)

初後ともに女三宮に一の札打て結たる故に中とす。

柏木は初に不出して後斗りに出て三の札打。上下結

たる故、是も中也。

花葵紋 (朱)

初後ともに女三宮に二の札打て結たる故中とす。其

外結たる札なき故中りなし。」^{四八}ウ

黄菊紋 (朱)

初後ともに女三宮に一の札打て結たる故中とす。源
氏は初に不出して後斗りに出て三の札打。上下結たる
故是も中也。柏木は二の札打て上下結たれとも初に
女三宮に二の札打たる故、二の札は女三宮に成る故
に、柏木は中に成らず、点なし。すべて如此初二炷
の内に出たる札と後に打たる札と結ざるは点なし。

糸薄紋 (朱)

初後女三宮に一の札打て結たる故中りとす。柏木も
初に不出して三の札打て結たる故是も中り也。」^{四九}

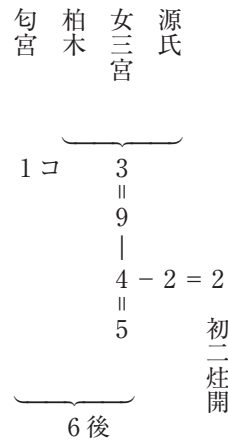
オ

匂宮香之記 禰長除 (朱)

〔表〕」^{四九}ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、「源氏」「女三の宮」「柏木」の香（地香）を各三包、「匂宮」の香（客香）一包の計十包の中から、八包を出香する。
 * 試香は、一般に地香のみという場合が多いが、本組香では「匂宮」の香のみ行う。また、答えには十炷香札を用いる。

まず、地香九包から四包を除き、残りの五包に「匂宮」の香一包を加えて六包とする。一方、除いた四包の中の二包を初段として二炷開きで焚き、包紙を開いて正答を披露する。その後、先の六包を一炷ずつ焚き、すべて聞き終わってから、前段の同様に包紙を開いて正答を披露する（後段）。

三種類の地香は、無試十炷香の通りに、一炷目を「一」の札、二炷目から順に、異なる香について「二」「三」の札を打つ。「匂宮」の香は試香があり、それと認識できるため、「ウ」の札を打つ。初段の二炷開きは、地香の試香のように考えればよい。たとえば、一炷目が「柏木」香であれば、後段でも「柏木」香に

「二」の札を打つ。つまり、初段の二炷の香と後段の六炷の香との間で、同香に同じ札を打つのである。なお、初段の二炷が同香であった場合も、後段の同香に同じ札を打つことで対応する。すなわち、初段の同香を聞き違えて別香二炷とし、「一」「二」の札を打った時も、その二枚と後段の地香五枚との組み合わせで、同香を聞き当てると得点になる。初段の二炷の出方によっては、初段と後段との同香の組み合わせが二組あることも想定されるが、要するに、初段と後段の間で、同香の組み合わせがあれば得点となる。なお、初段の二炷に出なかった香が、後段の五炷の中のみ出て、後段だけで同香を聞き当てた場合は、前段で用いなかった数字の札を打った場合にのみ得点が与えられる。

具体的には「匂宮香之記」の例を参照されたい。この場合、初段二炷はいずれも「女三宮」の香であった。これに対し、「玉椿」紋の札の持ち主は、「一」と「二」の札を打つが、後段（七炷目）の同香に「一」の札を打つたため、初段・後段で同香を聞き当てたことになり、一点を得ている。また、「柏木」の香は、前段に出ず、後段のみに二炷出た（三炷目と六炷目）のを、前段で打っていない「三」の札で聞き当て、二点を加えた。「花葵」紋の札の持ち主は、初段では「玉椿」と同じ「一」「二」の札を打つが、後段の同香（七炷目）に「二」の札を打ち、一点

を得た。そして、「黄菊」紋の札の持ち主も、初段で「一」「二」の札を打ち、後段の同香（七炷目）に「一」の札を打って、一点を得た。「源氏」の香は、後段のみ（五炷目・八炷目）に出ているが、前段で打っていない「三」の札で聞き当て、二点を加えた。だが、後段にのみ出た「柏木」の香（三炷目・六炷目）は、後段のみを見れば、いずれも「二」の札で聞き当てているが、初段の「女三宮」の香に、同じ「二」の札を打っているため、前段と後段との香の組み合わせが誤っており、点は得られない。さらに、「糸薄」紋の札の持ち主は、初段二炷ともに「一」の札を打ち、後段の同香（七炷目）にも「二」の札を打って、一点を得ている。また、初段に打たなかった「二」の札を、後段の「柏木」の香（三炷目・六炷目）に打つことで、さらに二点を加えている。

「香之記」は、香元（正答を書く場所のこと。33藤裏葉香では「香本」）に、香の名目を出香順に記す。また、前段には、聞き当てたか否かに関わらず、札の数字を記しておく。後段（三炷目以降）では、「匂宮」香を聞き当てた場合、何炷目に出たかによって、順に「おほつかな」「誰に問まじ」「いかにして」「初めもはても」「しらぬ我身ぞ」「かほる」と記し、聞き外した場合、札の数字を記す。

記録点としては、初段は聞き当てても点にならない。後段の

み得点の対象となる。「匂宮」香の独り聞きは五点、二人は四点、三人以上は三点ずつで、聞き違いは、一人では星二つ、二人以上では星一つを付す。また、地香の独り聞きは二点、二人以上は一点で、聞き違いにも星は付けない。

蘭之園本は、「おほつかな」「誰にとはまし」「いかにして」「始もはても」「しらぬ我身は（竹幽本では「我身ぞ」）」を、竹幽本と同様に聞きの名目とするが、これらを順に「一」から「五」までの五種類の香銘としても用いる。各二包、全十包を用意し、無試十炷香の要領で二炷聞きにする。これに対し、竹幽本は、前段と後段との同香の組み合わせによって加算するという組香の構造や得点の方法が、かなり複雑になっていると言えよう。

(2) 『源氏物語』との関わり

香の名目に見られる「源氏」「女三宮」「柏木」「匂宮」、および聞きの名目の「かほる」（薫）は、すべて登場人物を示す。薫は源氏と女三宮の間に生まれた息子、と世間では思われていたが、実は柏木が女三宮に近づいて生まれた子であった。成長した薫は、自分の出生に疑いを抱くようになり、巻名歌を詠む。

おほつかな誰に問はまし
いかにして始めも果ても
知らぬわが身ぞ (⑤二四頁)

現代では「誰に問はまし」（誰に問い尋ねたらよいのだろう）と解釈するが、竹幽本は「誰に問ふまじ」（誰にも問い尋ねられな
いだろう）」と打ち消しにしている。

そのため薫は若い時から出家を願望する物静かな青年になつた。経典によると、仏は生まれつき芳香を発した、とされる。薫もまた、香ばしさが身に備わっていた。それを羨んだのが、光源氏の孫にあたる匂宮である。薫に対抗して薫物に執心し、薫とは正反対の社交家であった。この二人の貴公子が、光源氏亡き後の主人公になり、物語は展開する。

43 紅梅香

【翻刻】

△紅梅香

心ありて風の匂はすその、むめに

まつうくひすのとはすや有べき

一 十炷香の札を用。

一 風の香三包、匂の香三包、園の香一包、待の香一包、梅の香一包、鶯の香一包、都合十包出香とす。

一 風の香、匂の香、園の香、待の香、外に拵、試に出す。梅五〇オ鶯の香は試なし。

一 風の香三包に園の香一包、梅の香一包を入交て、初の五炷

とし、大包して上に初と記置く。

一 匂の香三包に待の香一包、鶯の香一包を入交て、後の五炷とし、大包して上に後と記置く。

一 初の五炷の大包より取て一炷充焚出し、五炷聞終て札を記録して包紙を開くなり。又、後の「五〇ウ五炷も同然。

一 記録点は、園と梅と両炷ともに聞中たるは一炷に二点充、都合四点也。園と斗か梅と斗聞かば一点也。待と鶯と両炷ともに聞中たるは一炷に二点充、都合四点也。待斗か鶯ばかり聞は一点充なり。風と匂の香は、一人聞二点、二人より一点充也。」五二オ

一 札打様は

風に 一の札 匂に 二の札

園に 三の札 待に 三の札

梅に ウの札 鶯に ウの札

一 記録認様左のごとし。」五二ウ

紅梅香之記

〔表〕五二オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

	初	後	札
風	3コ	1	
匂		3コ	2
園	1コ	3	3
待		1コ	3
梅	1		ウ
鶯		1	ウ

* 本香には、「風」「匂」の香、各三包と、「園」「待」「梅」「鶯」の香、各一包の、全十包を出香する。このうち、「風」「匂」「園」「待」の香は、別途、試香^{*}を行う。「梅」「鶯」の香の試香はない。まず、初段として、「風」の香、三包に、「園」「梅」の香、各一包を加えて、全五包を大包みにする。これを「初^{*}の五炷」とし、表に「初」と記しておく。次に、残りを後段として、「匂」の香、三包に、「待」「鶯」の香、各一包の計五包を大包みにする。これを「後^{*}の五炷」とし、表に「後」と記しておく。本香は、「初^{*}の五炷」から一炷ずつ焚き、その度ごとに答えの十炷^{*}香札を打つ。試香のある「風」「園」の香には、それぞれ「二」「三」の札、残りの一炷「梅」の香には「ウ」^{*}の札を用い

る。五炷聞き終わって、札を記録してから包紙を開き、答えを披露する。「後^{*}の五炷」も同様であるが、札の打ち方は、試香のある「匂」「待」の香には、それぞれ「二」「三」の札、残りの一炷「鶯」の香には「ウ」の札を用いる。

記録点は、初段では「園」「梅」の香、後段では「待」「鶯」の香の、それぞれ二炷とも聞き当てた場合は、一炷につき二点ずつ、計四点となる。どちらか一炷の場合は、一点である。また、「風」「匂」の香の場合は、独り^{*}聞きが二点、二人以上は一点となる。

以上の竹幽本は、蘭之園本と全く同じ組香である。

(2) 『源氏物語』との関わり

竹幽本は紅梅香の次に竹河香がくるが、蘭之園本は逆に竹川香・紅梅香の順である。これは蘭之園本が用いた『源氏小鏡』⁽²⁾の巻の配列が竹川・紅梅であるのに対して、竹幽本が利用したと考えられる『源氏物語』の版本(『源氏物語湖月抄』など)は紅梅・竹河と続くことによるのであろう。

物語では、薫の実父が柏木であることを光源氏に知られ、柏木は良心の呵責に耐えられず若死にする。長男の柏木の死後、次男の大納言が家を継ぐ。大納言は娘を匂宮に嫁がせようと考え、紅の紙に書いて贈った歌が巻名歌である。

心ありて風の匂はす園の梅にまづ鶯の間はずやあるべき

（⑤四九頁）

「園の梅」を我が娘、「鶯」を匂宮に例えて、匂宮が娘に問いかけてくれるように願っている。

香の名目は蘭之園本も竹幽本も同じで、すべて巻名歌に詠まれた言葉による。ただし和歌の「まつ」を現代では「先づ」と理解するが、蘭之園本と竹幽本は「待つ」と捉えている。

44 竹河香

【翻刻】

△竹河香

たけ川の橋うちいでし一ふしに

深き心の底はしりきや

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一の香、二の香、三の香、各三包充、ウの香一包、都合十

包出香とし、皆焚終りて包紙を開くべし。

一 一二三の香、外に拵へ試に出す。客香試なし。」五三ウ一 出

香十包を打交て、二包充二結、三包充二結にして、二炷聞、

三炷聞、三炷聞、二炷聞と焚出すべし。十炷皆聞終て後に、

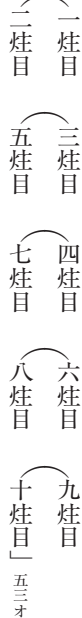
折居を二つ充重て廻し札を受るべし。

一 二炷聞組合様は

二炷聞 三炷聞 三炷聞 二炷聞（朱）



中と中と組（朱）



右の通組て札を打べし。

一 記録は、客独聞四点、二人三点、三人より二点充、地香独

聞二点、二人より一点充也。

香組合認様左のごとし。

一二（朱） 碁の勝 二一（朱） 碁の負

一三（朱） 風に散る 三一（朱） うつろふ花

二三（朱） 心ありて 三二（朱） 池の汀

一ウ（朱） 桜の花盛 ウ一（朱） 姉君」五三ウ

二ウ（朱） 花の賭物 ウ二（朱） 妹君

三ウ（朱） 竹河 ウ三（朱） 其夜のこと

一一（朱） いかなるふし 二二（朱） ふかき心

三三(朱) 一ふし

右の通認べし。

假令、三炷目ウと聞、五炷目一と聞ば、姉君と認るべし。

皆是に準知るべし。

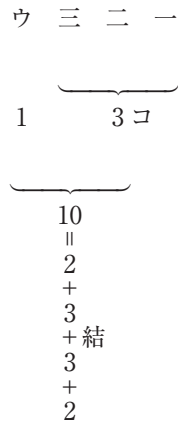
一 記録書様左に記す。」五四オ

竹河香之記

〔表〕 五四ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、「一」「二」「三」の香(地香)を三包ずつ、「ウ」の香(客香)を一包の計十包を出香とする。地香のみ、前もって試香を行う。本香をすべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

十包の本香は、二包と三包、各二組とし、二炷聞き、三炷聞き、三炷聞き、二炷聞きとして焚き出す。答えには、十炷香札を用い、十炷すべて聞き終わってから、折居を二つずつ重ね、五

回廻す。一回目には一・二炷目、二回目には三・五炷目、三回目には四・七炷目、四回目には六・八炷目、五回目には九・十炷目の答えの札を打つ。最初と最後の二炷聞きは、聞いた順序に答えればよいが、二回の三炷聞きについては、順序通りに札を打つのではなく、一回目の三炷聞きで、まず最初と最後の香を組みにして答え、次に、中の香と次の三炷聞きの中の香を組みにして答え、そして、二回目の三炷聞き最初と最後の香を組みにして答えるという複雑さがある。

記録点は、客香の独り聞き四点、二人は三点、三人以上は二点であり、地香は、独り聞き二点、二人以上は一点である。前述の香の組み合わせ(一・二炷目、三・五炷目、四・七炷目、六・八炷目、九・十炷目)によって、「碁の勝」以下、十五の聞きの名目のうちのいずれかを記し、聞き当てた香には点数を合点で記す。

蘭之園本では、「一」「二」の香、各三包と「ウ」の香、二包の計八包を二包ずつ、二炷聞きにする。竹幽本よりも香の数が少ないため、聞きの名目も九つしかない。竹幽本は、蘭之園本の名目に、「風に散る」「うつろふ花」「心ありて」「池の汀」「其夜のこと」「一ふし」の六つを加え、また、組香の構成に二炷聞きと三炷聞きを交えて、札の打ち方に香の順序とは異なる部分設けるなど、複雑さが増している。

(2) 『源氏物語』との関わり

蘭之園本の聞きの名目は九つある。竹幽本はさらに六つ追加して、それらはすべて後掲の和歌に含まれる。

名目は二つの場面に分けられ、一つは十五歳になった薫が、思慕する姉妹の邸宅を一月下旬に訪れた時である。そこで薫は「竹河」という催馬楽(宴会などで歌われる宮廷歌謡)を歌った。その歌詞は、「竹河の、橋のつめなるや、花園に、我をば放てや、少女たぐへて」で、薫がそれを歌ったのは、歌中の「少女」を懸想する姫君になぞらえたのである。その翌朝、薫から届いた手紙の中に書かれていたのが巻名歌である。なお名目には傍線を付けた。

竹河の橋うち出でし一節に深き心の底は知りきや (5七四頁)

返歌は姫君の兄弟が代作した。

竹河に夜を更かさじと急ぎしもいかなる節を思ひおかまし (5七四頁)

その年の三月、姉妹は庭に咲く桜を「賭け物」(勝負事に賭け

る賞品。(5七九頁)として、碁を打った。妹が勝ち、次の和歌を詠んだ。

風に散ることは世のつね枝ながらうつろふ花をただにしも
見じ

妹君に仕える女房も詠作した。

心ありて池の水際に落つる花泡となりてもわが方に寄れ
(5八一頁)

姉君は冷泉院(前の天皇)に嫁ぎ、薫は落胆した。その翌年、薫が冷泉院に参ると、姉君の女房たちは懐かしがり、一年前に薫が「竹河」を謡ったことを和歌に詠んだ。

竹河のその夜のことは思ひ出づや偲ぶばかりの節はなけれど (5九二頁)

45 橋姫香

【翻刻】

△橋姫香

はしひめの心をくみてたかせさす

さほのしづくに袖ぞぬれぬる

一 二炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三客香、各三包、都合十二包、二包充結合せて、其内

より一結除け、残五結也焚出す」五五才地香外に挿す。試に出す。

一 薫方五人、姫方五人と分る薫方上座なるべし。

一 盤の向ふに人形の臺をかざる。姫方は、間に随ひ簾を一巻

充卷上る斗也。但、翠簾卷様に口傳有。

一 薫方人形の進退は各地香盤間の進なし」五五ウ

〔図〕

へ(朱) 二炷共に間は一間充進む也。五人共に間は五間進む也。

へ(朱) 二炷の香、五人ながら間違たる時は、五間退く。

へ(朱) 五人の内にて、二炷ながら中りと中らざると消合は其数て中多時也。

進外多時は其数退也。

へ(朱) 二炷の内、一炷中りたるは進退なし。一炷中二人有れば

二炷」五六才中りに立て一間充進むべし。假令は四人一炷充

中れば、二人分にて二間行く也。

へ(朱) 十七間目に行着て、簾の前に至れば、香は残りても盤の

勝負は終る也。人形の進数、都合十四間也。

一 姫方簾の卷様は客地香盤間の進なし

へ(朱) みすの内に人形二つ置く。香の間に随ひ、みすを巻く斗也。

へ(朱) 二炷ともに間は、翠簾を一巻あぐる也。」五六ウ

へ(朱) 簾五卷迄あげて、其後六度目はあげず。琵琶を大姫君の

前に置く。七度目は琴を中君の前に置く也。八度目より又

簾を巻べし。都合十二度巻結れば香は終らずとも勝也。簾

十二巻に、琵琶・琴を加へて、都合十四度也。人形の進数

と等し。簾の卷落しは薫方の進退と同前也人形進時は、簾卷上る人形。退く時は、簾巻下すこの進也。

一 翠簾の卷様仕形習ひ有。

一 記録は中斗を認るべし。認様左のごとし。」五七オ

橋姫香之記 一三除(朱)

〔表〕」五七ウ

橋姫香立物圖

〔図〕」五八オ

〔図〕」五八ウ

同盤の圖 溝一筋 界十七間 鑑カキの手に圖のごとく落

葉の蒔繪有り

〔図〕」五九オ

《秘記》

△橋姫香

一 習簾卷様の事

へ（朱） 姫方の人形、臺の長さは盤の幅一はいに拵るべし。幅は人形を拵へ、その前に琵琶・琴を置く程に見合すべし。高も恰合次第也。

へ（朱） 翠簾に二所糸をかけて、巻く様にするべし。二本柱の裏に穴を六つ明て、その穴にみす巻の糸に針を付て一穴く〜にさすと」四オ翠簾上るやうに拵るべし。荒増左圖のごとし。

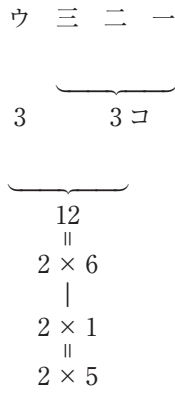
〔図〕 翠簾表の圖四ウ

〔図〕 翠簾裏の圖

但し不残卷揚し圖也五オ

【考察】

（一）竹幽本組香の方法



本組香は、二炷開きの盤物である。本香には、「二」「二」「三」「三」に「客」の香、各三包の計十二包を用意する。これらを二包ずつ組にして、一組を除き、残りの五組（十包）を出香とする。これに先立ち、「二」「二」「三」の地香は、別途、試香を行う。答え

には十炷香札を用い、記録にはあたりだけを記す。

連中は、薫方と姫方、五人ずつに分ける。もちろん上座は薫方である。盤の向かい側に大姫君と中君の人形を置いた台を飾る。『秘記』には、台の長さを盤の幅に合わせ、また、人形の前に琵琶・琴が置けるよう、幅に余裕を持たせることなどが記されている。

薫方の人形の進退は、まず、二炷ともに聞き当てると、一問進む。五人とも聞き当てれば五問進み、みな聞き外すと五問退く。五人の中で、二炷聞き当てた人と聞き外した人とがいる場合は、その数の差を進んだり退いたりする。二炷のうち、一炷のみ聞き当ても進退はないが、二人で一炷を聞き当てた場合は、二炷聞き当てたものと見て一問進む。たとえば、四人で一炷ずつ聞き当てた時は、二炷聞き当てた人、二人分と見做して、二問進む。なお、進む数に、客香・地香や独り聞きとの区別はない。十七問目に行き着いて、姫方の人形の簾の前に至ると、香は残っていても、盤の勝負は終わる。薫方の人形は、最初、一問目に置かれ、盤の角で方向転換する際に二問飛び越すため、進む数は十四問ということになる。

一方、姫方は、二炷ともに聞き当てると、翠簾を一巻き上げる。姫方の聞き当てた数により、簾を巻いたり下ろしたりするのだが、その計算方法は、薫方の人形の進退に準じる。五巻き

まで上げたら、六回目は上げずに、琵琶を大姫君の前に置き、七度目は、琴を中君の前に置く。八度目から、また簾を巻き上げていく。全部で十二回巻けば、香は残っていても勝となる。簾を十二巻きし、琵琶・琴を一回ずつ置くことで、全十四回ということになる。これは、薫方の人形が進む数と等しい。また、客香・地香や独り聞きの違いがないのも、薫方と同じである。なお、簾の巻き上げ方に口伝があるといい、『秘記』には、翠簾（立派に飾られた簾）の二箇所に糸を掛けて巻くようにすることや、柱の裏に穴を六つ開け、御簾巻き糸を付けた針を一穴ずつ下に刺していくと翠簾が上がるようにすることが、二枚の図とともに解説されている。

蘭之園本は、竹幽本とほぼ同じ組香である。竹幽本は、蘭之園本の組香の方法をそのまま踏襲したと思われる。ただし、蘭之園本は、薫方の進む数を全十七問とする一方、姫方の簾の巻き上げなどは計十四回であり、姫方が有利になっている。竹幽本は、蘭之園本と同じ道具を用いながら、薫方の人形の進め方を工夫することで、より平等なルールを構築している。

(2) 『源氏物語』との関わり

光源氏の弟にあたる八の宮は勢力争いに巻きこまれ、源氏が政権を掌握すると落ちぶれてしまった。さらに不幸は続き、最愛の夫人に先立たれ、京都の屋敷を火事で失ってからは、二人

の娘とともに宇治にある山荘に引きこもっていた。八の宮は世の無常を悟り、出家を志したが、娘たちを捨てるわけにはいかず、俗人のまま仏道修行に励んだ。薫もまた遁世を願っていたので、八の宮の生き方にあこがれて宇治に通い、仏門の教えを受けようになった。

二年後の晩秋、薫が馬に乗り宇治へ行くと、八の宮は山寺に籠もり不在であった。二人の姉妹は父宮から教育を受け、音楽では姉が琵琶、妹が琴を習っていた。月夜に簾を巻き上げて、二人が合奏しているところを、薫はこっそり垣間見して、姉君に心ひかれた。その様子を盤上で再現している。

46 椎本香

【翻刻】

△椎本香

たちよらんかげとたのみししゐがもと

むなしきとこになりにけるかな

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三の香、各三包充、ウの香四包、都合十三包の内、一

包除け、残十二包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 一二三の香、外に拵、試に出す。客香試なし。」五九ウ

一 香組合様如次、

- 一の香二包 ウ香一包 一結也
- 二の香二包 ウ香一包 一結也
- 三の香二包 ウ香一包 一結也

已上三結を初に焼出し、九炷焚終て、一の香一包、二の香一包、三の香一包、以上三包打交て、其内より一包除け、跡にウ香一包入て、都合三包と成る。一結六〇オにして名残と名付て、終に三炷聞にして、焚出す也。此時は、ウの香斗を聞て、地香二炷は聞捨にすべし。

一 香組合名目

- ウ一（朱）宇治の宮 一ウ一（朱）かほる
- 一ウ（朱）匂ふ宮 ウ二二（朱）椎か本
- 二ウ二（朱）立よらん陰 二二ウ（朱）此一こと
- ウ三三（朱）草の庵 三三ウ（朱）初瀬詣六〇ウ
- 三ウ三（朱）宇治の中宿

へ（朱）名残三包内ウ香名目

- 一二三の香は聞捨にて、客香斗を聞くべし。
- 初に出たるウには 宇治の宮
- 中に出たるウには かほる
- 末に出たるウには 匂ふ宮

一 記録点は、何人にも一点充也。名残中り二点充也。認様左のごとし。六一オ

権本香之記 二除（朱）

〔表〕六一ウ

【考察】

（一）竹幽本組香の方法

一	3コ	2	+ 1	} 3 1 2
二	3コ	2	+ 1	
三	3コ	2 + 1	2 + 1	
ウ	4 1 + 1 + 1 + 1 + 1			} 3 : : 名残

* 本香は、「一」「二」「三」の香（地香）各三包と、「ウ」の香（客香）四包の、計十三包の中から、十二包を出香とする。答えには十炷香札を用い、本香をすべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。本香に先立ち、三種類の地香は、別途、試香を行う。客香には試香はない。

まず、前段として、「一」「二」「三」の香、各二包に、「ウ」の香を一包ずつ加え、三包一組を三組作って焚く。九炷すべてを焚き終えたら、次に、後段として、「一」「二」「三」の香、各一包を交ぜ、そこから任意の一包を除いた上で、「ウ」の香一包を加え、三包一組とする。これを「名残」と名付け、三炷聞きにして焚く。この時、「ウ」の香だけを聞き、地香の二炷は聞捨にする。なお、十炷香札は「一」「二」「三」「ウ」各三枚、計

十二枚であるが、本組香では「ウ」の香のみ四包で、「ウ」の札が一枚足りない。この点について、竹幽本は特に言及しないが、後段では、地香「一」「二」「三」のうちのいずれか一包が除かれるので、その香の札を、後段の「ウ」の香が出た時に、「名残」の答えとして打てばよい。

前段には、「宇治の宮」以下、九つの聞き^{*}の名目が列挙されている。また、後段の「名残」については、「ウ」の香が何番目に出たかによって、順に「宇治の宮」「かほる」「匂ふ宮」という名目になっている。

記録点について、前段は、聞き当てた人数によらず一点ずつであるが、後段の「名残」は、聞き当てると二点を得る。

以上の竹幽本は、蘭之園本と全く同じ組香である。強いていえば、聞きの名目として、蘭之園本が「かほる大将」としているところを、竹幽本は「かほる」としている程度の差異しか見られない。なお、後段「名残」の札の打ち方については、前述の方法を、蘭之園本は、「但、此ウの札不足には、捨香のあまり札をウにして打也。」と明記している。

(2) 『源氏物語』との関わり

名目は、前述の通り、蘭之園本が「かほる大将」、竹幽本が「かほる」である以外は一致する。また名目の順番も同じで、初めの三つは登場人物を表わし、次の第四・五は巻名歌、第六・七は

別の和歌、第八・九は物語の冒頭にある「初瀬に詣でたまふ」「宇治のわたりの御中宿」^{なみやどり}(⑤一六九頁)にちなむ。

薫の親友である匂宮は、薫から宇治の姉妹のことを聞いて興味をひかれ、二月に初瀬(大和国の長谷寺)に参詣したとき、宇治を「中宿り」(外出の途中で宿泊する所)として選び、八の宮と手紙を交わした。それを契機に、匂宮は妹君と文通するようになった。

その年の七月、薫は久しぶりに宇治を訪れ、八の宮から姫君たちの後見を頼まれ引き受けた。八の宮は感謝の気持ちを和歌に託した。

われ亡くて草の庵は荒れぬともこの一言は枯れじとぞ思ふ
(⑤一八二頁)

翌月、八の宮は亡くなり、弔問に訪れた薫が八の宮の部屋を見て詠んだ歌が巻名歌である。

立ち寄らむ蔭と頼みし椎が本むなしき床になりけるかな
(⑤二二二頁)

椎の木は実がなり、食用となる。薫が頼りにしていた八の宮を、

椎の木にたとえたのである。

47 角総香

【翻刻】

△角総香

あげまきにながき契りをむすひこめ

おなしところによりもあはなん

あげ巻は、糸のむすびめ、幾度もおなし所へめぐるものなれば、此こゝろを以て組たるもの也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 角総アゲマキの香十包、糸イトの香十包、都合二十包、出香とす。」六二

オ角総斗を聞、糸は聞捨也。

一 角総の香、外に拵、試に出す。糸の香は試なし。

一 角総十包に糸一包充むすび合、十組に組合、前五結、後五結とわけて大包して、上に前後と書附置也。

香組合様

〔糸角総〕 各五結び 〔糸角総〕 各五結び 一 六二ウ

右の通、組合せ打交、二炷充焚出す也。

一 二炷聞にして、角総斗を聞也。糸はき、捨なり。前五結・後五結として、先前五結は皆聞終て、包紙を開くなり。角総、二包の内、五炷ながら始にばかり出るか、又五炷とも

に跡に斗出ん時、五炷ながら聞たる人あらば、第一の勝として、後の五結は聞ず、香は終る也。折居を一炷毎に廻して札を受べし。」六三オ

一 角総前五結の内にて、始に三包、跡に二包と所替りて出たる時は、後の五結を焚出すべし。

一 後の五結は、二炷充にて包紙を開く也。此時は二包の内、角総始に二度出れば、前五結に始に三度出たると都合五度おなし所へ出る也。其時は是限りにて、香は終る也。又後の五結に角総さきへ出ず、跡にばかり三度出る時は、前の跡へ出たる両度と、都合五度跡へ」六三ウ出る也。是も是限にするべし。兎角あげまきの香、前後の内、五包共に先に成とも跡に成とも出て揃ふ迄聞也。

一 札は二炷の内、角総に斗り一枚充、何れの札にても打べし。

一 記録点は、何人にも一点充、角総の中りに斗りかくる。糸は聞捨故に点なし。認様左のごとし。」六四オ

角総香之記

〔表〕 六四ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

角総	10	10	前
		2 × 10	5
		2 × 10	5
糸	10	2 × 2	5

本組香では、冒頭に卷名歌を挙げた後、「角総」(通常は「角」と表記する)が、同じ結び目を糸が何度も通るものであることに拠る組香であると述べる。このような組香の意図を明言するのは、竹幽本では珍しい。

*本香には、「角総」の香と「糸」の香、各十包の計二十包を出す。これに先立ち、「角総」の香のみ試香を行う。本香では、「角総」の香だけを聞き、「糸」の香は聞捨である。

「角総」の香と「糸」の香を各一包、二包ずつ十組にする。この時、「角総」「糸」の順で五組、「糸」「角総」の順で五組に作る。これらを交ぜ、五組ずつ前段と後段に分けて大包みにし、表に「前」「後」と記しておく。そして前段から、二炷聞きで「角総」の香のみを聞く。

答えには十炷香札を用い、折居を一炷ごとに廻して札を打つ。竹幽本には、札の打ち方についての言及はないが、あるいは「角総」の香のみに札を打つという方法か。前段すべてを聞き終えたら、包紙を開いて正答を披露する。

「角総」の香が、一組二包のうち、五包すべて先に出た場合、

あるいは、後に出た場合に、全部聞き当てた人がいれば、「第一の勝」として、後段は行わず、組香を終える。一方、「角総」の香が、先に三包、後に二包というように、先に出た時と後に出た時とがある場合は、引き続き後段を行う。

後段は、二炷開きとし、二炷聞いては包紙を開き、正答を披露する。この時、前段の正答と見合わせて、「角総」の香が先でも後でも、五包すべてが出揃った時点で組香を終える。たとえば前段で、「角総」の香が先に三包出た場合、後段で「角総」の香が先に出ることが二包あれば、「角総」の香が先に出る五組はすべて出香されたことになり、残りの香はすべて、「角総」の香が後に出るものばかりである。ここで香が終わる。従って、「香之記」の十九・二十炷目の答えを記入する欄は、必ず空白のまま残ることになる。

以上の竹幽本は、蘭之園本と全く同じ組香である。組香の意図も、蘭之園本に「注」として挙げられている文章にほぼ等しい。

(2) 『源氏物語』との関わり

八の宮の一周忌が近づき、宇治の山荘では残された姉妹が五色の糸を総角あけまにしていた。卷名にもなった総角とは糸や紐の結び方で、輪を上と左右の三方に出し、両端の房を下に垂らしたもので、ここでは法会に使う品を飾るためである。

薫も手伝いに訪れ、思いを寄せている姉君に巻名歌を贈った。

総角に長き契りを結びこめ同じ所に寄りも合はなむ（⑤）

二二四頁）

蘭之園本と竹幽本に「総角は糸の結び目、幾度も同じ所へ巡る」
（総角は糸の結び目が何度も同じ箇所に来る）とあるように、薫
は姉君といつまでも同じ所にいたいと詠んだのである。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝
文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期
研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番
号253330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一
部である。

注

（1）以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小
学館、一九九四～一九九八年）により、その巻数と頁数を（ ）
を付して示す。なお、本文には、適宜手を加えた箇所がある。

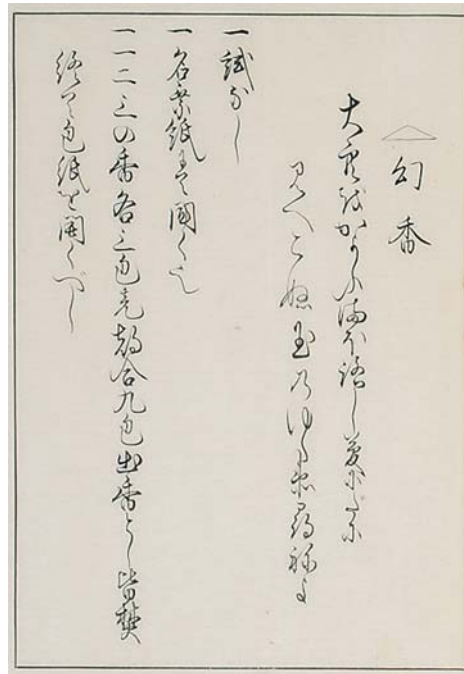
（2）『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉
書院、二〇〇五年）所収の第一系統第一類本による。蘭之園本
がその系統によることは、武居雅子氏が『源氏千種香』の依拠

本を探る」（『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月）で論
考された。

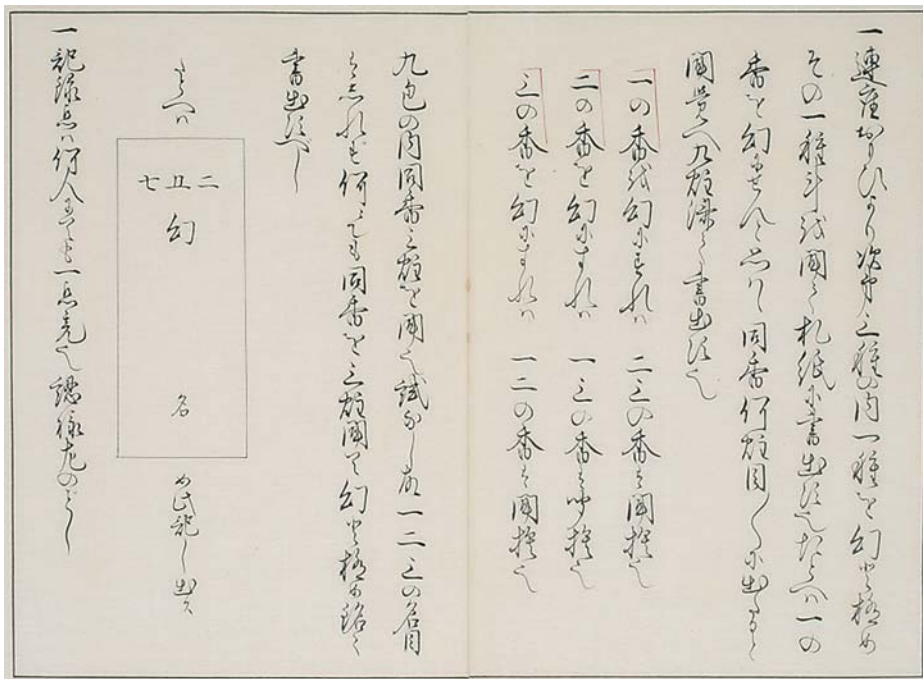
（3）「宇治の宮」は『源氏物語』にも『源氏小鏡』にも見られ、宇
治の八の宮を指す。

【影印】綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。

(四十四丁裏)



(四十五丁表)



(四十五丁裏)

幻香記

本	二	一	三	三	一	二	一	二	三
	名来	名来	名来	名来	名来	名来	名来	名来	名来
	月	日	月	日	月	日	月	日	月
	二	皆	皆	二	皆	皆	二	皆	皆

白宮香

一 十瓶香の乳を用
 一 源氏の香か之宮の香柳の木の香名之包先白宮香
 一 色紙の香部合斗也の内八色紙香
 一 白宮香斗外箱紙の出入地香紙

(四十六丁裏)

(四十六丁裏)

(四十六丁表)

一 地香九色香其内四色除殘五色亦白宮の香一色
 如(部合斗也) 柳之障も四色の内二色紙と初小
 二 瓶園小焚出(色紙) 園後小二色と二瓶先
 焚出(二瓶皆紙) 色紙と園(障) 障二
 一 地香之種も焚出十瓶香の通る小札と川白宮香
 と紙のる取不定てウの札と川初二瓶香の
 内(一) 番目二番目小出(二) 番目と紙小出(三) 番目
 一 番目柳本香(紙) 始紙柳本香(一) の札と中

一 次致初二瓶の香も後出(二) 瓶の香も園香も札と
 小出(三) 中(紙) 初二瓶も小園香も(紙) 出(三) 例も準(紙)

一 白宮香出(一) 園小丸の香と紙と

一 三番目 紙の香 四番目 誰小回(紙)

一 五番目 紙の香 六番目 初めも(紙)

一 七番目 紙の香 八番目 紙の香

一 祀障紙白宮徳園五色二人四色三人の点先園遠標
 墨二(二人) 点先障紙香障紙二人二人より一色先

(四十七丁表)

(四十七丁裏)

(四十七丁表)

(四十八丁表)

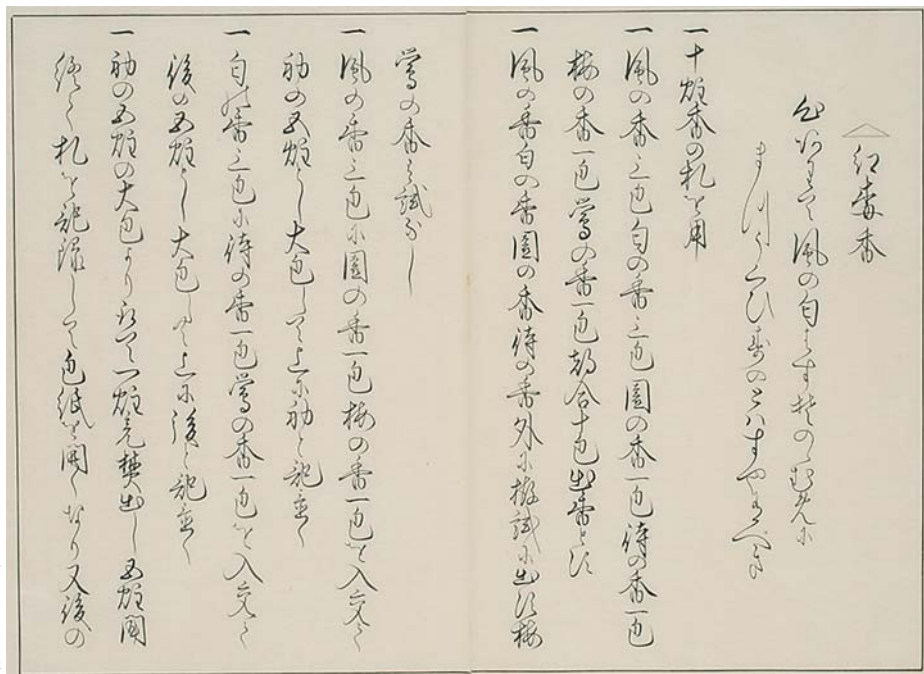
<p style="color: red;">玉楕紋</p> <p>初後も小カニ宮小一の札少く結ぶる座小中より 柏も初小不出く後少小出くこの札少 上下結ぶる座思も中より</p> <p style="color: red;">花菱紋</p> <p>初後も小カニ宮小一の札少く結ぶる座中より 其外結ぶる札少に座中より</p>	<p>一祀淨港御大撰方小座次 と德く一初二板中より結ぶる</p> <p>一香元々出番の名目と祀一國の下より其札少 斗小出く後少より上下結ぶる座思も中より 一香元々出番の名目と祀一國の下より其札少</p>
--	---

(四十八丁裏)

(四十九丁表)

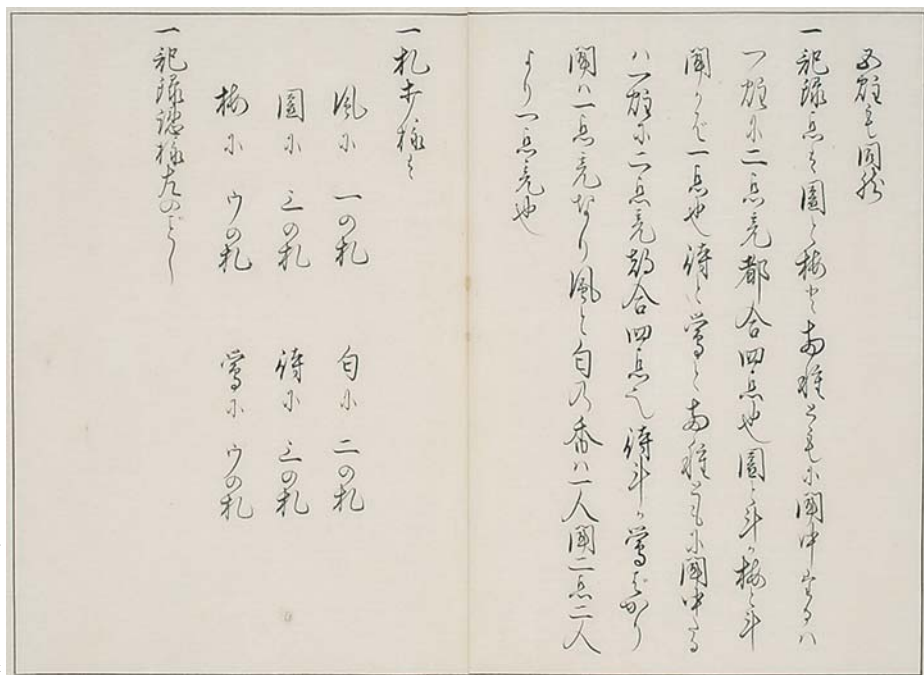
月日	花菱紋		玉楕紋				白宮香と祀		花菱紋		玉楕紋		白宮香と祀		花菱紋		玉楕紋		白宮香と祀	
	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一
	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二

(四十九丁裏)



(五十一丁表)

(五十一丁裏)



(五十二丁表)

(五十二丁裏)

竹河香之祀

	一番	二番	三番	四番	五番	六番	七番
本	心のり	深之心	姉君	春の夜	深の夜	春の夜	深の夜
若松	心のり	深の夜	姉君	春の夜	深の夜	春の夜	深の夜
玉桂	心のり	深の夜	姉君	春の夜	深の夜	春の夜	深の夜
花菱	心のり	深の夜	姉君	春の夜	深の夜	春の夜	深の夜
黄菊	心のり	深の夜	姉君	春の夜	深の夜	春の夜	深の夜
系帯	心のり	深の夜	姉君	春の夜	深の夜	春の夜	深の夜

辛巳月 日

一 祀 深の夜 大の祀
 一 祀 深の夜 大の祀
 一 祀 深の夜 大の祀

一 祀 深の夜 大の祀

(五十四丁裏)

(五十四丁表)

一 草より人形の遠段の遠段
 一 草より人形の遠段の遠段
 一 草より人形の遠段の遠段

橘永香

一 二飯園
 一 十飯香の礼
 一 一 二 三 番香 各之也 初合 十二色 二色 光 結合
 七々 其因より 一 括 障子 残 五 括 十色 替 出 氏

(五十五丁裏)

(五十五丁表)

(五十六丁表)

四	三	二	一	〇	西
三十一	二十九	八	七	六	五
四					

二版小園の二回先進むと、五人小園の五回進むと、
 二版の香五人分へつゝ園邊へもつゝ、又四回退へ
中各録、本録退へ
 又人の園より二版さへつゝ、中へつゝ、消令へ
中各録、本録退へ
 二版の園二版中へつゝ進むと、一版中二人より二版
 中へつゝ、一版先進むと、彼今四人版先中
 より二人分より二回つゝ
 十七回目よりつゝ、一版の香より、八香のさへつゝ
 盤の積算は、八人の進板が合十四回
 一版の香の巻種は、
名録、本録退へ
 みま村小園二回、香の園小園のつゝ、巻つゝ、
 二版も小園の翠草巻と一巻つゝ

(五十六丁裏)

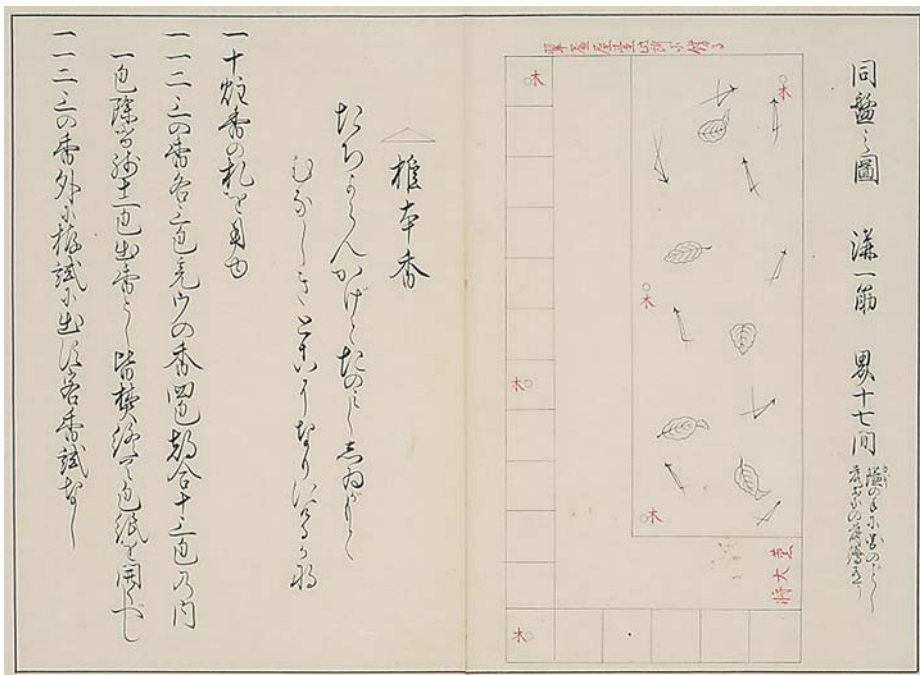
(五十七丁表)

一版五巻とつび、其後六夜目とつび、七夜目とつび、
 大夜目の香小園とつび、七夜目とつび、中夜の香小園とつび、
 也八夜目とつび、又一巻とつび、一版合十三夜巻落れ、
 香小園とつび、巻十二巻も現置翠とつび、
 一版合十四夜也、八人の進板、等々、一版の巻落れ
 一版の進退、同常、
八人の進板、一版の巻落れ、
 退、則ち、一版の巻落れ、
 一版の巻落れ、
 一版進の中とつび、二版九のつゝ

橋本香の記 一三除

年 月	本		葉		葉		葉		葉		葉		葉		葉	
	ウ	二	二	ウ	一	一	二	二	ウ	三	ウ	二	二	ウ	二	ウ
	ウ	二	二	ウ	一	一	二	二	ウ	三	ウ	二	二	ウ	二	ウ
	ウ	二	二	ウ	一	一	二	二	ウ	三	ウ	二	二	ウ	二	ウ
年	月	日	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
年	月	日	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
年	月	日	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
年	月	日	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

(五十七丁裏)



一 香組合様次

一の香二色 ウ香二色 一絡く
 二の香二色 ウ香二色 一絡く
 三の香二色 ウ香二色 一絡く

二の香一色 二の香一色 一色 一絡く
 一色 陣香 陣香 ウ香一色 一色 一絡く

一 香組合名目

ウ二一 宇治の文 一ウ一 〇好系
 一ウウ 白小宮 ウ二二 推りか
 二ウ二 立〇八陰 二二ウ びつし
 ウ三三 草井庵 三三ウ 初濃詣

(六十丁裏)

(六十丁裏)

一 記 諸君何人か二色一色 名所中一色 二色 被録及

ウ三三 宇治の中宿

一 二 三の香 宇治の宮

中宿 〇好系

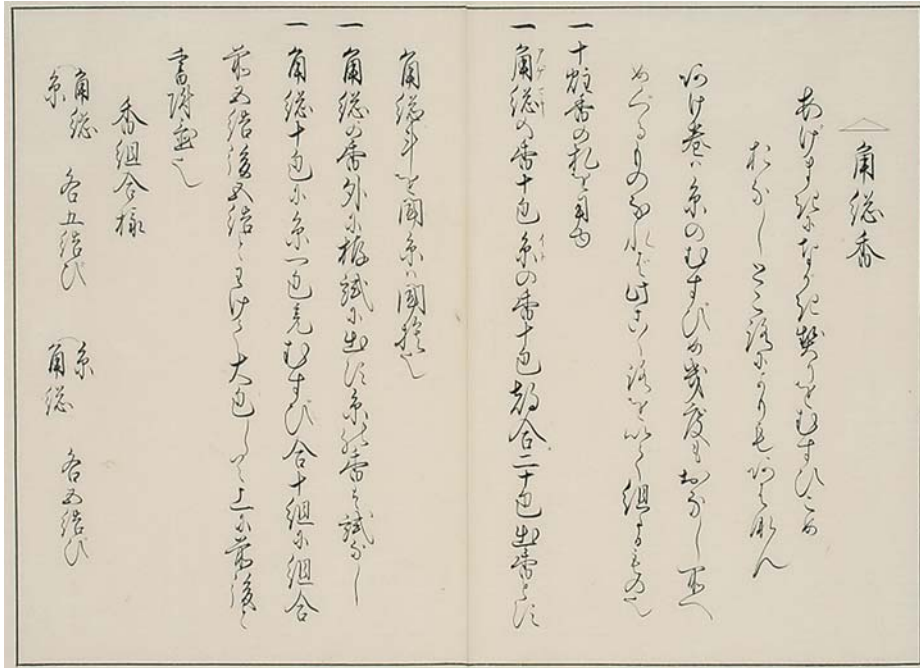
末小宮 〇好系

推りか 二色

名所	名所	名所	名所	名所	名所	名所	名所
草井庵	草井庵	草井庵	草井庵	草井庵	草井庵	草井庵	草井庵
白小宮	白小宮	白小宮	白小宮	白小宮	白小宮	白小宮	白小宮
びつし	びつし	びつし	びつし	びつし	びつし	びつし	びつし
宇治の文	宇治の文	宇治の文	宇治の文	宇治の文	宇治の文	宇治の文	宇治の文
五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五

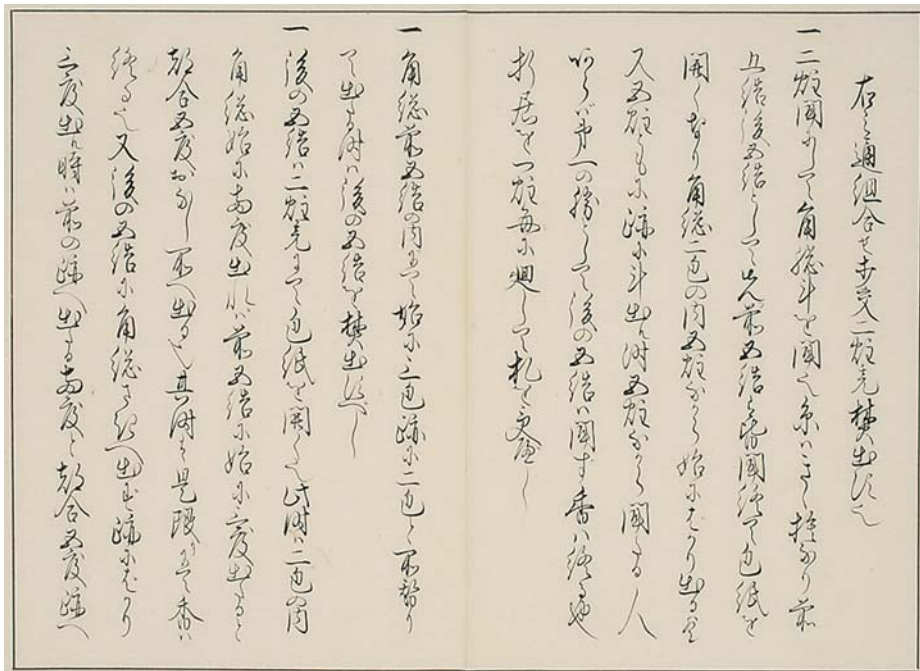
(六十一丁表)

(六十一丁裏)



(六十二丁表)

(六十二丁裏)



(六十三丁表)

(六十三丁裏)

